作成（2024 年度）

簡易版 TP（ティーチング・ポートフォリオ）

氏名	上嶋　明
所属機関名	工学部情報工学科
職位	准教授
在籍年	21 年

教育の責任

工学部情報工学科に所属し，主に基礎，専門共通，コンピュータシステムの各系列の専門教育科目を担当している。また，研究室においては 4 年生と大学院生の研究指導と就職指導を担当している。さらに，学科においてはカリキュラム検討ワーキンググループ長として将来的なカリキュラムの改訂案を検討・立案するとともに，学務委員として各授業担当者の割り当てと時間割の編成，卒業研究発表会の手配などを担当している。

学科外では科学ボランティアセンター員を務め，センターの運営と科学ボランティアリーダー養成プログラムに関連する基盤教育科目の実施に携わっている。また，教育開発センター員，および IR センター員として全学の FD 活動と教学 IR の推進に携わっている。

与えられた役職や教育を最大限遂行するため，JAED（日本高等教育開発協会）が主催するカリキュラムコーディネーター養成研修会（中級編）とファカルティディベロッパー養成研修会（中級編）に参加し，それぞれ提出した審査レポートが合格の判定となり，JAED から「カリキュラムコーディネーター（中級)」と「ファカルティディベロッパー」の認定を受けている。

教育の理念

社会構造や環境の変化の激しい時代において，情報工学は特に変化と技術進展の速い学問分野である。そのため，既に確立した理論や技術を単に身につけさせるのみでなく，社会に出た際にそれらを複合的に発展・活用し，実際の問題解決に役立てることができるようにさせることを目指している。また，各自が学生時代に学んだことを基に未知の問題解決に積極的に臨むとともに，既成概念にとらわれずにアイデアを創造することで，いつかは新しい技術や革新的なサービスを生み出せるような人材となれるようにすることを大きな目標としている。

授業においては試験対応や単位取得のみを目的とした学習にさせないように，いま学んでいる知識や技術が将来的にどのような応用や発展に繋がるかということを意識させることで，授業内容や学問分野に興味を持たせる。4 年生と大学院生の研究指導では，特に学生自らに新しい手法やアイデアの発案を促すとともに，これまで身につけたことを実際に社会に存在する問題の解決に繋げるためにはさらに何が必要かについて常に考えさせる。

教育の方法・方針

・総合的な成績評価

講義科目においては小テスト，提出課題，確認テストなどを適宜課し，それらを複合的に用いて成績評価を行うことにより，試験前のみではなく開講期を通しての学修を促している。

・練習や演習を多く用いた講義

教員の説明を見たり聞いたりしただけで習得した気になることのないよう，実際に自分の手を動かして課題に取り組ませることにより，解き方を自然と身につけさせる。講義科目では基

本的にスライドを用いて授業を進めているが，計算を要する部分では学生に練習や演習を行わせ，その理解状況も踏まえた解説を行いながら板書で模範的な解答方法を示すようにしている。

・授業スライドの工夫

授業スライド中には練習問題を適宜挟み，そこまでの授業内容の確認と振り返りを行うとともに手を使わせることで，集中力を持続させるようにしている。また，理解の困難な専門的な概念に対しては図や身近な例えを用いることで，直感的に理解しやすいように工夫をしている。

・トピック毎の理解度の分析と授業改善

各講義科目で実施する確認テストにおいては，合計点に加えて大問ごとの得点率を毎回集計して分析している。その結果を基に，得点率の低かったトピックに対しては次回授業の際に説明方法を変更したり重点をおいて説明したりするなど，授業改善に有効に活用している。

・卒業研究での毎週プレゼンテーション

卒業研究においては 4 年生全員が原則週 1 回以上のプレゼンテーションを行った後に全員が議論に加わることにより，プレゼンテーション力とコミュニケーション力の向上を図っている。

教育の成果

・学科から授業アンケートの集計結果に基づいた授業評価最優秀賞を 4 回，優秀賞を 6 回それぞれ授与されるなど，高い授業評価を受けた。

・授業アンケートの自由記述欄への回答内容において好意的な記述を多く得ている。

・研究室 4 年生と大学院生の進路決定率 100%を 2018 年度より今年度まで継続中である。

・研究室の卒業・修了生は情報系企業を中心としたエンジニアとしての就職が多い。

今後の目標

・各学生の前提知識・能力の把握

近年，多様な学生の入学に伴い，学生間の知識・能力の差が年々大きくなっているように感じられる。初回授業時など，なるべく早い段階で各学生の状況を把握し，それに合わせて授業方法を調整する。また，理解度が低い学生が「置いてきぼり」とならないよう，特に留意する。

・頻繁なフィードバック

従来の紙での小テストや提出課題は採点に時間を要していた。そこで，より LMS を有効活用することで，小テスト，提出課題，アンケート等の頻繁な実施と迅速なフィードバックを行う。

・アクティブラーニングの推進

各授業において演示実験や，クリッカー，ペアワーク，グループワーク，ワークシートなどを用いた実習・演習など，より多くのアクティブラーニング的な要素を加える。

・自分自身の継続的な教育力向上

FD 関係のフォーラムや研修会には学内外を問わずに積極的に参加し，自分自身の教育力や教育開発力の継続的な向上を図る。

根拠資料

・授業アンケート結果（各評価項目，自由記述欄）と授業評価最優秀賞・優秀賞賞状

・授業スライドの例

・確認テストの大問ごとの得点率集計の例

・研究室卒業・修了生の就職・進学状況

・「カリキュラムコーディネーター（中級)」認定証，「ファカルティディベロッパー」認定証